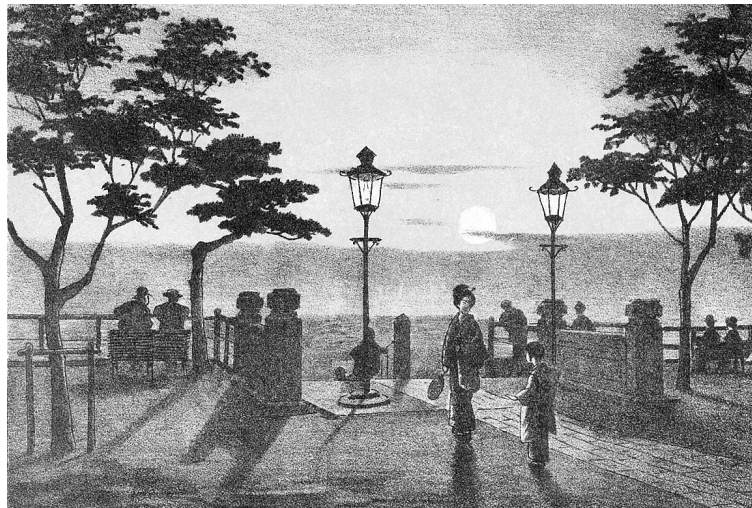


資料館だより

第 68 号
2011.9.30

特別展予告

あ た ご やま
愛宕山 — 江戸から東京へ —

東都名勝図絵（明治26年）より「愛宕山」

港区の愛宕山は標高約26m、都区内で最も高い天然の山です。慶長8年（1603）、当時桜田山と呼ばれたこの山に徳川家康が愛宕権現を勧請しました。戦勝や防火に連なる神・愛宕権現を祀る愛宕神社は京都に総本社があり、境を護る性格もありました。これを源とする港区の愛宕山もまた、江戸を護る信仰の地となったのです。

愛宕山はまた、抜群の展望地でもありました。山頂からは、愛宕下に連なった武家屋敷や江戸湾、お台場や房総半島までも望むことができました。江戸へ勤めに来た武士や幕末に來日した外国人も、この眺めに心動かされています。

明治19年（1886）、山頂に公園が開かれると、園内には貸席の「愛宕館」や附属の展望塔「愛宕塔」といった西洋建築が現れ、ここから新しい東京の街並みを見渡すことが出来ました。

関東大震災の後、愛宕館跡地には東京放送局（現・NHK放送博物館）が建ち、様々なニュースや娯楽がラジオ電波に乗って届けられました。愛宕山に情報発信という新しい機能が加わったといえるでしょう。

今日、愛宕山からの眺望は失われていますし、かつて見えていた風景も大きく変化しました。愛宕山を訪れる人は絶えませんが、江戸や東京の街において愛宕山がどのような存在だったかが、十分に知られているとは言えません。

本展覧会では、愛宕山の歴史やイメージを伝えることを目的とし、各コーナーのテーマを、文書・絵画・文学資料などから探ります。

会 期：平成23年10月22日（土）

～12月4日（日）

会 場：港区立港郷土資料館

造園家・長岡安平と近代港区の公園

— 芝公園・愛宕山公園史の一断面 —

高山 優
(学芸員)

明治31年(1898)に、東京帝国大学の人類学教室にあった坪井正五郎によって、歴史的な発掘調査が芝丸山古墳で行われました。この折、調査用資器材の調達など、物的な側面から様々な形で調査に多大な貢献を果たした人物がいました。造園家・長岡安平です。

長岡は、天保13年(1842)肥前国大村藩に生まれました。生来病弱で、草木の栽培や小鳥鶏類の飼育に専念していたといえます。明治に入ると長岡は、郷土の先輩である楠本正隆と行動を共にし、明治3年(1870)に上京、同5年には新潟県令に就任した楠本と共に新潟に赴き、さらに同8年楠本の東京府知事栄転と共に再び上京、同11年に東京府土木掛に奉職しました。ここで、長岡は公園設計を担当し、その後大正3年(1914)前後まで、東京府あるいは東京市の職員として公園関係の業務に専念しました。

長岡は一時、芝公園の一面に居住していました。そこは、府知事公舎の隣地に当たり、元は東京府の芝公園附属官舎でしたが、明治21年(1888)に東京府から払い下げられ、長岡が自邸として入手したものです。

ところで、長岡の事績の研究に当たっている相田諭希典氏によれば、東京府・東京市時代に長岡が何らかの形で関与した東京市中(当時)の公園は11箇所にとぼるとされ(註1)、港区では芝公園内の紅葉滝・溪流が良く知られています(註2)。

芝公園は、明治6年(1873)1月に発せられた太政官布告第十六号によって誕生した、東京市内で最初の公園の一つです。長岡は、明治38年(1905)この芝公園の一面に、地形を活かした滝・溪流の設計・整備に当たります。今日、東京タワーの足下に見える紅葉谷の滝と溪流は、関東大震災や戦災などで荒廃した滝と溪流を、

昭和59年(1984)長岡設計時に近い状態に改修したものです。

この芝公園内の滝・溪流整備工事の完了から4年後の明治43年(1910)、東京市は「東京市公園改良設計調査報告書」を発表します。これは明治41年(1908)から進められてきた市内13公園の整備計画のための調査報告書で、芝公園・愛宕山公園の大規模な改修計画が策定されつつあったことを知ることができます。

芝公園から愛宕山一帯は、絶好の眺望を求め得る高台、園地として整備する上で、優れた条件をもった平地に区分でき、ここに増上寺を始めとする歴史的建造物が分布する「特殊ノ勝景」(「芝及愛宕山公園改良計画書」)を成していました。明治43年発表の計画案は、こうした特性を十二分に活かして整備を行おうとするものでした。計画内容の要点は、散策のためのアクセスの整備、動植物園の開設、博物館施設の設置、愛宕山公園と芝公園との高架橋による接続などで、このために必要とされる墓地や既存建物の移設・整理なども計画されていました。

実は、「祖庭」と称され、芝公園と深く関わりをもっていた長岡の意見や考えが、この計画にどの程度反映されたのかを知ることは、目下のところできていません。しかしながら、芝公園・愛宕山の歴史を語るとき、長岡安平が避けることのできない人物であることに異論は出ないでしょう。

(註1) 相田諭希典「長岡安平の造園作品に関する調査」

(『都市公園』162号-1、東京都公園協会、2003年9月)

(註2) 東京都公園協会に長岡の手による「芝公園内瀑布設計図」が所蔵されています。

【参考文献】長岡安平顕彰事業実行委員会編『祖庭 長岡安平翁 - 長岡安平の近代公園における功績』(1999年)、東京都公文書館編『都史資料集成』第4巻(2004年)

乃木文庫 ― 館蔵資料より ―

平田 秀勝

(文化財保護調査員)

『乃木文庫』は、赤坂八丁目に所在する明治の陸軍大将乃木希典の邸宅であった「旧乃木邸」

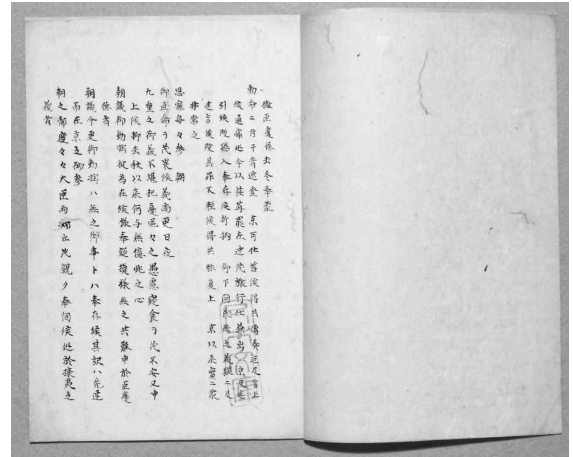
(港区指定有形文化財)より、昭和60、62年(1985、87)の2度にわたり当館へ移管された総点数556点の文書群です。

大正元年(1912)9月、乃木希典・静子夫妻が明治天皇に殉じて自刃した後、遺言により邸内にあった数多くの蔵書・文書類は、親類・友人の他、東京市や故郷の長府図書館(現在の山口県下関市立長府図書館)、乃木が院長を勤めた学習院などへ寄贈されました。旧乃木邸とともに東京市へ寄贈された蔵書・文書は、その後、東京都を経て、港区へ所管変えとなっています。長期間、旧乃木邸内の湿気の高い場所に保管されていたことから、資料の多くは虫損の影響などにより開くこともできない状態になっていたため、当館では、『乃木文庫』の公開に向けて、平成8年度から全点の修理事業を行い、15年の歳月をかけ、昨年度、すべての修理が完了いたしました(『資料館だより』第67号1頁参照)。

『乃木文庫』は、江戸時代後期の書籍・文書類と明治時代の書籍・書類に、大きく分類することができます。

江戸時代後期の資料は、長府藩士であった乃木希典の父・^{まれつぐ}希次によって書き写された書籍を中心とし、その半数以上が有職故実、礼法、弓術に関するもので占められています。これは、希次が、銀姫(長府藩第12代藩主毛利元運の次女)や元敏(毛利元運の6男。長府藩第14代藩主)ら藩主子弟の傳役(教育係)、藩校敬業館の礼法師範などを勤めていたことによるものでしょう。その他、幕末期の世相を反映してか、幕府・朝廷の動向に関する資料が4点あり、このうち3点は幼名の「無人」^{ななひと}を名乗っていた少年時代の希典が書き写したものです。これらは当

時の希典の関心が、どの方面に向いていたかがうかがえます。



『因州公建白』

「八月十八日の政変」で、都を追放された長州藩と三条実美ら七卿に対して寛大な処置を求める鳥取藩主池田慶徳の建白書。裏表紙に「乃木無人源頼時写之」と記されている。

明治時代の書籍・書類は、乃木希典が収集したもので、書籍は歴史や軍事に関するものの他、自費出版した貴重な兵学書、思想書なども含まれます。また、点数は少ないものの、陸軍将校として地位を極めた乃木にふさわしく、軍事・対外政策に関する資料が見られます。対外政策関連資料のうち、台湾に関するものが半数以上を占めますが、これは明治29年(1896)、乃木が台湾総督に就任した際に入手、作成したものと考えられ、日本統治時代における台湾の政治・軍事・教育などに関する貴重な資料といえるでしょう。

今回、修理が完了し、公開可能となった『乃木文庫』は、乃木希典の蔵書・文書類としてだけではなく、江戸後期から明治にかけて生きた長府藩の中級藩士の職務等を考える上でも大変に興味深い資料です。当館では、今後も展示などを通じて館蔵資料の紹介に努めていきます。

中世の善福寺

竹村 到

(文化財保護調査員)

現在の港区域には、江戸時代に多くの寺院があったことはよく知られています。それらの多くは、徳川家康によって幕府が開かれ、江戸の大規模開発の後に移転してきた寺院です。現在区内を代表する寺院である、三縁山増上寺や万松山泉岳寺なども江戸の拡大に伴って移転してきた寺院です。

その中で、元麻布一丁目にある麻布山善福寺は、開創以来移転のない寺院です。善福寺は天長元年（824）に真言宗の寺院として開創され、関東では浅草寺に次いで2番目に古い寺院といわれています。鎌倉時代の頃には、当時の住職であった了海源明によって浄土真宗（一向宗）に改宗されました。それ以降、善福寺は一向宗の関東の拠点となりました。

現在、善福寺には7通の中世文書が残されています（「善福寺文書」、東京都指定文化財）。この文書は、区内に伝来する中世資料の中でも、特に豊富な内容を持っています。以下、「善福寺文書」と西岡芳文氏の研究に拠りながら、中世の善福寺について見ていきましょう。

西岡氏は、「江戸周辺から鎌倉付近にわたる地域で、中世まで遡る創立伝承や什宝をもつ真宗寺院は、おおむね阿佐布門徒の系譜を引く」と指摘しています。この「阿佐布門徒」とは、善福寺を中心とする門徒のことで、その指導者は前述した了海上人です。このことは、中世において善福寺が関東で中心的な役割を果たしていたことを裏付けます。さらに「阿佐布門徒」の活動は、関東地方にとどまらず、遠く京都・中国地方にまで広がっていたようです。

時代が下り戦国時代に入ると、「阿佐布門徒」は石山本願寺の中でも一派を形成するほど影響力を強めていました。西岡氏は「天文年間には麻布善福寺が完全に本願寺の一員となり、門主

の片腕となって活動し」たことを明らかにしています。この頃、本願寺の日記である『私心記』には、「阿佐布ノ衆」などの記載が見られるようになります。

その一方で、永禄9年（1566）10月2日付の「北条氏朱印状」が示すように、関東では永正年間（1504 - 21）頃から一向宗への弾圧がかなり広範囲におこなわれたようです。小田原北条氏も当初はその流れに乗って一向宗を弾圧していました。しかし、長尾景虎（後の上杉謙信）が関東侵攻のために南下してくると、それに対抗する必要から一向宗との連携を図り、その制禁が解かれました。この時の本願寺との仲介も善福寺が担当していました。

天正5年（1577）6月13日付の顕如書状や天正8年（1580）閏3月24日付の教如書状からは、本願寺が織田信長と対立して籠城した際、本願寺への援助が善福寺からなされていたことがわかります。豊臣秀吉による小田原攻めの際には、秀吉から寺院の安全を保証する朱印状が発給されています。

なお、善福寺の寺域跡からは、ほぼ完型の板碑が1基出土しています。板碑とは、中世に造立された供養塔の一種です。同様の場所からは板碑の破片も複数出土しています。善福寺には江戸時代の地誌にも記されたように、多くの板碑があったといわれています。このことも中世において、多くの信仰者がいたことを示唆しています。

江戸時代に入ってから、徳川家康から朱印地を拝領して、広大な境内地を持ち、地域の惣鎮守となりました。

【参考文献】西岡芳文「阿佐布門徒の輪郭」『年報三田中世史研究』10号、2003年11月）、同「葛西門徒」の謎をさぐる」『親鸞と青砥藤綱』、2005年11月）。『新修港区史』（1979年5月、「善福寺文書」の写真と翻刻文を掲載する）

港区の歴史的建造物 ～コンクリート造～

川上 悠介
(文化財保護調査員)

コンクリート造の建物が日本に現れてから、100年近くが経ちました。木造の建物と比べると歴史は浅く、新しい構造体といえます。しかし、その初期の作品も徐々に減り、現存するものは文化財として注目を集めるようになりました。ここでは、コンクリート造の建物の100年を振り返ってみたいと思います。

港区内にある最古のコンクリート造の建物は、慈恵会病院にある大正5年(1916)築、旧御大典記念館、かつての図書館です。酒井式ブロック構造と呼ばれた、ブロックと鉄筋コンクリートの混構造、3階建ての建物です。酒井式というのは、設計者であった酒井祐之助の名前からくるものです。酒井は、早い時期からコンクリートを研究し、実践導入を試みた人物でした。同じく酒井の作品に、新橋駅前にある堤第一ビルがあげられます。大正9年(1920)築、鉄筋コンクリート造5階建てのビルです。区内で2番目に古いコンクリート造の建物で、区内に残存する関東大震災前のコンクリート造の建物はこの2棟だけです。いずれも、コンクリート造の黎明期を今に残す貴重な歴史遺産といえます。

大正12年(1923)9月1日、東京は関東大震災による、揺れと火災によって大きな被害を受けます。これがきっかけとなり、コンクリート造の需要は急増します。震災後まもなくの大正15年(1926)に、建築家アントニン・レーモンドは霊南坂にコンクリート打放しの自邸(現存せず)を完成させます。コンクリート打ち放しの建物を住宅として使用する試みは、日本でも初めて、世界でもかなり早い事例であったといわれています。コンクリート造は湿気が高く、当時は居住する人への健康被害が疑われていました。東京大学教授であった、建築家内田祥三は、大正15年から麻布に鉄筋コンクリートで自邸を

造り始めます。翌年、未完成の状態で住み始め、問題点を改善したようです。

コンクリートの普及には、設計だけでなく、施工する職人にも修練が必要でした。当時の状況を今に伝える建築を芝3丁目で見ることができます。赤羽橋南交差点の北東角地に建つ伏見三宝稲荷は、昭和3年(1928)に建設された鉄筋コンクリート造の建物です。小規模ながらも、コンクリートで木組や海老虹梁を再現している点が特徴です。この社殿は、大規模な鉄筋コンクリートの工事に初めて参加する職人が、どうやって施工するかを事前に確かめるためにコンクリートで作った建物であったといわれています。わざわざ形の複雑な木造の社寺建築を模倣したのは実践に備えるためだったのかもしれませんが。この技術を元に完成した建物が、近年まで品川駅前にあった昭和5年(1930)築の京浜ホテルです。伏見三宝稲荷の和風建築とは対照的な洋風建築で、80年間ホテルとして運営を続けていました。残念ながら、ホテルの閉業とともに、解体されてしまいました。

戦後になるとコンクリート造の建物は、いかにコストを抑え、効率的に耐震性を出せるかという点でも研究が進められます。その結果、工事費用が下がり、普及に弾みがつきます。時が経つにつれ、修繕や補強の需要も増し、その技術や工法も発達しました。

近年では、文化財となるコンクリート造の建物も増え始め、文化財的な保存修復方法が議論されるようになりました。コンクリート造の文化財建造物の修復事例は木造に比べると少なく、新たな理念を創出し、保存・修復をおこなわなくてはなりません。建設当初の部材やデザイン、工法をいかに後世に残すか、コンクリート造建造物の文化財保護は、新たな課題です。

自転車と子どもたち

古写真から地域の歴史を読む

松 本 健
(学芸員)

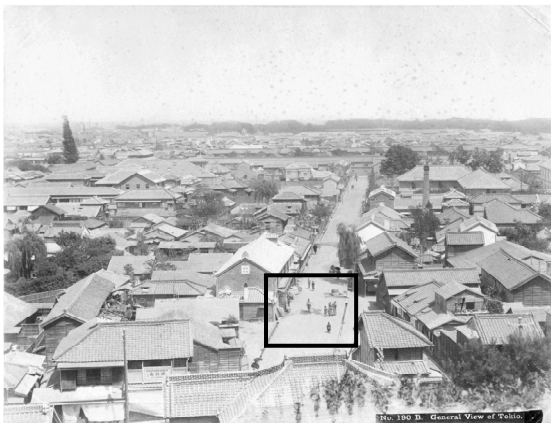
日本に写真の技術が伝えられたのは、嘉永元年（1848）のことといわれています。銀板写真と呼ばれた当時の写真は、撮影に時間がかかり、経費も高く、一般には普及しませんでした。安政年間（1854 - 60）に露出時間の短い湿板写真が伝えられると、写真は急速に広まり、外国人写真師はもとより、上野彦馬や下岡蓮杖といった日本人写真師によって数多くの写真が撮られ、現在に伝えられています。初期のころは「魂を抜かれる」と敬遠された写真も、幕末には勤皇の志士たちがこぞって写真館を訪れ、その姿を残すようになりました。当館にも幕末から明治にかけてのこうした歴史上の人物写真が保管されています（井関盛良コレクション〔港区指定有形文化財〕）。また、人物以外にも、当時の風景や風俗を記録した写真も数多く残され、本館にも200点ほど所蔵されています。

写真は、シャッターを押したその瞬間、カメラの前で起こっている事実を正確に記録した歴史資料といえるもので、画像を詳細に観察することで、数多くの情報を得ることができます。館蔵の写真の中から、興味深い画像を発見しましたので紹介します。

下の写真は、愛宕山から浜離宮方面を撮影したもので、中央の道路が現在の愛宕山トンネル

（画像の手前側）につながる道です。写真が小さいためはっきりしませんが、画面手前左にある建物の看板には「HAIR DRESSER（美容院）」と書かれ、洋風の髪を結う女性が多くなった時代の写真であると推測できます。この写真で興味深いのは、自転車に乗る洋装の人物とそれを見ている和服を着た子どもたちの姿が写されていることです。

日本に自転車が来たのは、明治3年（1870）といわれています。明治4年には太政官が車両に税金をかける布告を出し、当時該当する自転車は1台のみでした。明治20年代の中ごろには、自転車は1万台ほどになりましたが、高価であり、税金も高いため、自転車を持つことは一種のステータスでもあったようです。自転車を乗り回す人を子どもたちが珍しそうに見つめている風景は、今の時代にはなく、当時の世相を写しています。よく見ると子どもたちの後ろ、道路の端に樽のようなものが見えます。これは井戸で、木樋によって流れてきた水を溜めたものです。東京の近代水道の始まりは、明治31年（1898）です。この写真はそれ以前の風景と考えられます。写真に記録されたその他の情報から、この写真は明治20年代はじめごろのものであることがわかりました。この人物は、現在の港区の中で、自転車に乗った姿を残す最も古い人物かもしれません。



発掘された火の見やぐら

杉本 絵美
(文化財保護調査員)

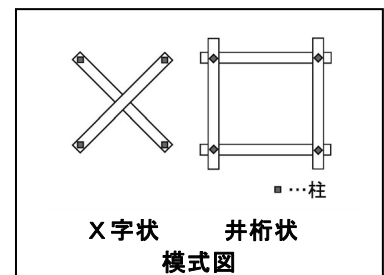
江戸時代、江戸の町はたびたび火事に見舞われ、武家屋敷や町屋には火事を発見する為の火の見櫓^{やぐら}が設置されました。火の見櫓に上った火の見番が火事を発見すると、版木や半鐘を鳴らし、それを合図に担当する大名火消や町火消が出動するのです。火の見櫓は、享保8年(1723)に江戸市中に設置するお触れが出て以降に普及したようです。江戸城を守ることが任務の定火消と方角火消の火の見櫓は高さ三丈(約9.1m)、その他の大名火消や町火消は二丈五尺(約7.6m)とされ、江戸の火事番としての役割から周囲の建物よりも高く作られていました。

江戸のあちこちに設置され、江戸の人々にとっては当たり前の存在であった火の見櫓ですが、現在ではその姿を見ることができません。その火の見櫓の跡が発掘調査で見つかったのです。港区No.149遺跡(新橋四丁目・西新橋二丁目・虎ノ門一丁目)の陸奥一関藩田村家上屋敷があった場所から、火の見櫓の基礎と思われる木組みが2基発見されました。

発見された2基のうち、北側の基礎は直径約35cmの丸太を地中にX字状に配し、その上に一

辺が約35cmの角材の柱を据えた状態で発見されました。柱と柱の間は約5.4mで、柱が乗る丸太の部分は面取りを施した面にほぞ穴が彫られ、柱の底面にはほぞが作り出されていました。基礎の南半分のみ調査でしたが二本の柱を確認できました。

もう1基は北側基礎のすぐ南側で発見されました。一辺が約30cmの角材を地中に井桁状に配



し、柱を据える部分4ヶ所にほぞ穴が作られており、ほぞ穴とほぞ穴の間は約6mでした。一辺約38cmの柱が1本だけ残っていましたが、その底面になぜかほぞは作られていませんでした。

これらの地中に設置されたX字状や井桁状の木材は、軟弱な地盤に重量のある建造物を建てる為に採用された基礎構造と考えられます。

では、なぜこの2基の木組み基礎が、火の見櫓の基礎だとわかったのでしょうか。

今回の調査では3本の柱が残されていましたが、全て基礎の中心に向かって傾斜するように据えられていたのです。北側の基礎に残っていた柱は底面が斜めに切断されており、東側の柱で約75度、西側の柱で約80度傾いていました。南側の基礎に残っていた1本の柱の底面は斜めに切断されていませんでしたが、約75度に傾斜して据えられていました。先に述べた基礎構造とその上に据えられた傾斜する太い柱、そして田村家は「所々火消」、「方角火消」と呼ばれるいわゆる大名火消の役職についていたことから、発見された2基の木組み基礎は火の見櫓の基礎であると考えられるのです。

【参考文献】東京都埋蔵文化財センター『愛宕下遺跡Ⅰ』(2009年)



芝赤羽の久留米藩
有馬家の火の見櫓
が左上に見える。

高台にそびえ立ち、「有馬の火の見」として特に有名であった。

江戸自慢三十六興
「赤はね 火の見」
元治元年(1864)

事業予定 (平成23年10月～)

特別展 愛宕山 — 江戸から東京へ —

会 期：10月22日(土)～12月4日(日)

★資料館講座

会 場：港区立港郷土資料館 《入場無料》

「愛宕山・よもやま」を実施します。

開館時間：9：00～17：00

日程：①11月12日(土)、②19日(土)、③26日(土)

(本年度は夜間延長開館がありません)

時間：14:00～15:30

休 館 日：会期中の月曜日(10/24, 31, 11/7, 14, 21, 28)

会 場：①愛宕山 ②三田図書館地下1階 視聴覚ホール

および第三木曜日(11/17)

③三田図書館3階 集会室

◆ 展 示 解 説 (事前申込み不要) ◆

定 員：40名

※要事前申込み

11月3日(祝・木)、20日(日) 14:00～ 1時間程度

申込みの詳細は『広報みなと』10/11号に掲載予定です。

コーナー展

- ・「乃木文庫 - 館蔵資料より - 」 開催中～10月8日
- ・「慶應義塾大学所蔵考古資料展(仮)」 12月17日～平成24年1月18日
- ・「遺跡展」 平成24年1月20日～3月14日

講座など

- ・土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう!」 12月17日・平成24年2月18日
- ・資料館講座「江戸の大名屋敷(仮)」(全3回) 平成24年3月

・各事業の詳細は、『広報みなと』や郷土資料館ホームページをご覧ください。

・当館の刊行物の一覧は、ホームページに掲載されています。販売は、展示室横の事務室でおこなっています。

事業報告 (平成23年3月～平成23年9月)

- ① コーナー展「愛宕下の武家屋敷跡2」 1月21日～2月16日
- ② コーナー展「考古資料に見る近代史」 2月18日～4月20日
- ③ 資料館講座「近代教育と港区」
(第2回・第3回は震災によって中止) 3月4日
- ④ コーナー展「江戸開府前の港区 - 港区ゆかりの中世資料」
4月22日～6月15日
- ⑤ 土曜体験教室「古代のアクセサリーを作ろう!」
4月23日・6月4日・9月17日
- ⑥ 古文書講座「古文書を読もう」(全5回)
7月6・13・20・27日・8月3日
- ⑦ 夏休み体験ミュージアム
「チャレンジ! 縄文土器を作ろう」 7月30日・8月20日
- ⑧ 東京海洋大学海洋科学部附属水産資料館連携事業
夏休み学習会 ～東京湾 自然と人～
「東京湾の生きものたち」 8月18・19日
- ⑨ コーナー展「乃木文庫 - 館蔵資料より - 」
8月19日～10月8日

港区立港郷土資料館の利用案内

交 通 JR「田町」駅下車徒歩5分、都営地下鉄「三田」駅下車(A3出口)徒歩2分
都営バス「田町駅前」停留所下車徒歩2分、港区コミュニティバス(ちいばす)
「田町駅前」停留所下車徒歩2分、「田町駅西口」停留所下車徒歩3分

開館時間 9:00～17:00 《入場無料》

休 館 日 日曜日・祝日・第3木曜日

年末年始・特別整理期間

(特別展中の休館日は本頁上段をご覧ください)

※特別展前後の休館日※

10月 9日(日)～10月21日(金)

12月 5日(月)～12月16日(金)



『資料館だより』第68号

平成23年(2011)9月30日発行
編集・発行 港区立港郷土資料館

〒108-0014

東京都港区芝5-28-4

Tel. 03-3452-4966

Fax. 03-5476-6369

http://www.lib.city.minato.tokyo.jp/muse/

刊行物発行番号 23083-7541